

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370731

研究課題名(和文) Constructing an educational model for collaborative team teaching

研究課題名(英文) Constructing an educational model for collaborative team teaching

研究代表者

コリンズ ピーター (COLLINS, PETER J)

東海大学・外国語教育センター・准教授

研究者番号：10307241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人英語教員と外国人英語教員による、チームティーチングの在り方を数校の中等教育機関で調査したものである。質的調査を行った結果、現場では英語教育の二極化が存在することがわかった。1つはコミュニケーション強化でALTをさらに必要としていること。そしてもう1つはALTの存在意義が英語教育現場で総じて薄いことである。さらに教育実習生もTTの目的に関して指導を受けていない状況であった。しかしながらActivity Theoryに基づいたTTの骨組みを導入することで教員たちが共同に行うコミュニケーション指導の意識を改善し両者の役割を明確にし学習者の動機づけと言語習得を高めることが可能である。

研究成果の概要(英文)：The Investigators worked closely with Japanese teachers of English (JTEs) and assistant language teachers (ALTs) team teaching at one private and two public high schools. Narrative data reveal that traditional attitudes perpetuate two problematic dichotomies. The first is between the goals and practices of solo taught four skills classes and team taught conversation classes, and the second between ALTs' elevated status within conversation classes and their marginalized status within English education overall. Additional survey results show that pre-service teachers receive little guidance about issues related to "native" and "non-native" English-speaking teachers and remain uncertain about how to meet the goals of team teaching. However, a team teaching framework based on Activity Theory (Engestrom, 1987) supports JTEs and ALTs in shifting perceptions on teaching and learning English, clarifying JTE-ALT relationships, and nurturing student motivation and language acquisition.

研究分野：team teaching at secondary schools

 キーワード：team teaching ALT NEST-NNEST teacher collegiality secondary education situated language  
Activity Theory curriculum planning

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代以来、ティームティーチング(以下、TT)は日本の中等教育機関で日本人英語教員(以下、JTEs)と外国人教員(以下、ALTs)によって大規模に行われてきた。TTがもたらす教育効果の期待は未だ高く、文科省(以下、MEXT)は近年、ALTの数を日本全国で増やす方向性を示している。しかし、TT開始当初から、その英語教育効果への疑念も持ち上がっている。実際、かなり多くの日本の中等教育機関では4技能を教えるはずの授業をJTEが一人で大学入試合格を目標に行っており、日本語を使用する文法訳読式の授業を行っている。TTが行われているとしても、スピーキングやリスニング活動はJTEの授業の妨げになったり、英語の授業とは分離された種類のものとして取り扱われることが多い。この二極化はおそらく英語ネイティブスピーカー教員(以下、NESTs)と英語ノンネイティブスピーカー教員(以下、NNESTs)が持つ利点と欠点に対する先入観によって作られていると思われる。その一つの例が“Native Speaker (NS) Fallacy”(Phillipson, 1992)と呼ばれるものであり、NESTsはNNESTsよりも基本的な対人コミュニケーション能力が必然的によく備わっているという考え方である(BICS, Cummins: 2008)。このNS Fallacyが逆説的な意味にも発展し、ALTは会話の授業で雇用されているが、読み書きの指導に必要な文法やアカデミックな語彙指導、そして認知的なアカデミック指導には適さないと解釈され、そのような指導から除外されてしまう(CALP, Cummins: 2008)。その結果、ALTは学校の英語のカリキュラムの中では重視されないのである。今は「英語会話」に代わったが、前回の学習指導要領で設定された「オーラルコミュニケーション」という科目がこの状況を写し出す良い例である。

現行カリキュラムにおいても「コミュニケーション英語」「英語会話」そして「英語表現」という、内容も言語も切り離された科目が各々の高校教科書として出版され、統一されることはないのである。従って、TTを行ったとしても、それが生徒の動機づけや言語習得に影響を与えることは極めて難しく、大学入試にさえも効果をもたらさないものである。

TTにおけるALTの様々な役割が何年間も研究され、ALTは異文化理解の知識提供者であったり、動機を与える役割であったり、言語そのものを教える役割であったり、多くの貢献をしてきたが、JTEの役割が先行研究においても実践においてもほとんど見当たらず定義されていない。JTEとALTがいかに役割を分配するかという研究はなされているが、授業案や実際の指導におけるJTEとALTの関係を明確にする研究が少ない。そこで意義深いTTの骨組みを築くため、我々研究グループは数年間14の大学附属の中高等学校で調査を行った。いくつかのプロジェクトにTTの要素を加えて調査した：2つのMEXT主催のSELHiプロジェクト、1つのMEXT主催の「わかる授業」プロジェクト、東海大学主催の地域連携教育改革プロジェクト、そして10年間にわたる現職教員養成プログラム(TD)で実施した。

各々のプログラムで我々はActivity Theory (Engeström, 1987)を導入し、教員と生徒が英語を知識よりもコミュニケーションの道具として学ぶ方向に意識を高める骨組みを作ろうと試みた。Activity Theoryは学習目標、対象教科、授業教具を明確にしているだけでなく、授業中の活動の中で必要となる規則や役割といったコミュニティの意識も高める効果がある。

付属校ではほとんどの英語科が長期の専任ALTを雇用し、そのALTも生徒が十分

な成果がだせるよう熱意を持って取り組んでいる。このように多くの点で付属校の TT 実践は理想的である。また同じく重要なこととして、付属校の英語科主任は ALT の授業計画に 4 技能を導入することを重視し、さらに JTE は ALT の役割を理解しながら共同作業で授業計画、授業そして評価を行なった。その結果、JTE と ALT の両者が生徒の動機づけも仕事の満足感も得たと報告した。

## 2. 研究の目的

本研究グループも JTE と ALT のチームに参加して付属校で授業を行った。当初 Activity Theory を TT に当てはめるのは苦勞を伴ったものの最終的には成果が見いだせたため、2013 年度から 2015 年度にかけてリサーチクエスションの焦点を公立校に当てた。先行研究によれば公立の TT 教員はカリキュラム作成や教科書選定でほとんど自由が利かないと言い、また公立の JTE と ALT のチームも授業デザインや教材作成を共同で行う時間が少ない。結局、公立の ALT は生徒とのグループワークもほとんど実践できない状況である。そこで本研究は、Activity Theory を用いた骨組みを考慮し、現行の理想的ではない状況を乗り越えられるか？私立校で得た JTE-ALT の共同意識や生徒の学力向上などの良い結果は、公立校にも当てはめられるか？もしこの試みに効果があるならば、Activity Theory が公立教員に理解されて実際に実践を促す具体例として証明し、また同時に、この Activity Theory が TT で様々に求められる状況や制限にも臨機応変に対応できる骨組みを備えていることが証明できるであろう。

## 3. 研究の方法

2013 年度: 初年度は前回私立高校で実践した TT が可能かどうかのリサーチを再度

確認のために行った。本研究グループたちはある付属校で JTE と ALT のチームで行う「コミュニケーション英語」と「英語会話」の授業を 8 回視察し、ビデオ撮影を行い、使用教材と生徒のライティングサンプルを集めた。各々の授業で JTE と ALT が対等の関係か、TT での教員の関係、英語で行う授業について、そして生徒の学習成果について JTE と ALT 両方にインタビューした。さらに我々はその学校の他の JTE と ALT にも英語でインタビューを行い、TT の利点と欠点を聞き、記録を取った。また、我々は特に NEST や NNEST の利点に関する理解を学会や講演にて更なる先行研究を通して深めていった。

2014 年度: 2 年目は当研究グループが東京都と神奈川県 の 2 つの公立高校を数回訪れ、「コミュニケーション英語」と「英語会話」の 2 つの教科書を統合する目的に焦点を当てた。今回は英語で JTE と ALT に同時に議論してもらい、記録を取った。両校の教員たちに 2015 年度に授業を行うように求めた。また、筆者がスペインの中等教育機関を訪れた時、そこでは TT がほとんど行われておらず、ほとんどすべて NNEST によって授業が行われていた。英語の授業を視察し、英語で行う授業や生徒の NNEST への信用などをインタビューで聞いた。

2015 年度: 3 年目のプロジェクトは昨年度とほぼ同じリサーチを続けた。2 つの公立中高の「コミュニケーション英語」と「英語会話」を担当する専任英語教員の数人が協力して「コミュニケーション英語」の中に統一の教案と教材を作った。この授業で TT の教員たちに求められるのは相互のコミュニケーションであり、それは授業単元のコミュニケーション目標という点からも重要で、また英語で行う授業という原則や明確な ALT の役割分担設定という点から

も必要とされていることである。このリサーチではビデオ撮影とインタビュー録音の他にも生徒のライティングの成果も集められた。2013年度と2014年度に日本とスペインで集めたインタビューデータに加え、更に信頼度を高めるために7つの大学の教職履修学生と5名の教職担当教員の調査も行った。その調査は(1)高等学校でのNEST-NNESTの仕事と役割と(2)現職教員養成プログラムがNEST-NNESTの関係に関して影響があるか、またはどのように影響を与えるのか、を明確にした。

#### 4. 研究成果

TT といったような特定の指導アプローチの効果を一部の視点から限られた生徒数で数量的に検証するのは極めて難しく、誤った結果に導くこともあるため、本研究は本質的には質的なものとなり、様々な教育的な現場の声や教育環境を反映させることに重点を置くこととなった。今回の調査は、少人数ではあったものの、英語教員がTTの習慣を高めて再構築を目指すために労力をかけてくれた。しかし大きな困難も同時に見えてきた。まず第一の困難は教育実習のプログラムの段階でNEST-NNESTの関係やTTに関する指導が欠けていることである。私立高の現職教員も公立の現職教員も、自分たちが実習した際に上記の2点の指導はなかったと述べている。さらに調査すると、現職教員は過去教員自身が生徒時代に受けた指導法がNNESTとしてのベースを確立しており、実習で学んだことよりも大きく影響を与えていると述べている。実際の教育実習ではNS fallacyという概念に直面はしたものの、データを見ると、英語の授業におけるNEST-NNESTの本質的役割を理解するには至っていないようである。日本では30年以上もTTの歴史があるにもかかわらず、実習生も現職教員もTTの目的やJTEとALTの共同実践に関して

は意識が薄いままである。

2つ目に見えてきた困難は、現職教員による英語教育への展望があまり積極的な姿勢ではないという事実である。TTの要となりうるものは学校運営者、JTE、ALTそして生徒といったすべての側面が積極的な態度で臨むことである。しかし残念なことに(1)4技能を育成する会話クラスの促進と(2)ALTの日本英語教育界での薄い存在感、という二極化が続いている。日本ではJTEもALTもTTの状況に満足していないが、目標設定、学習効果、共同指導案や共同教材を議論する時間を作るのは難しい状況である。ALTの高い就業率、JTEの授業外の膨大な任務、そして入試の性質が変わらないこと、これらすべてがTTの改善につながっていない。

しかし暗い展望だけではない。今回の調査で、授業計画、教材作成、授業、振り返りといった様々な面々に携わったJTEとALTは、前向きな意見を述べ、授業の目的がオーセンティックなコミュニケーション活動に向いていれば生徒の学習動機は顕著に上がると報告している。また、ライティング未経験の生徒もALTからのフィードバックがあれば自発的に英語表現を繰り返し使うようになった。授業活動に意義深いものが加われば、JTE、ALT、生徒、そして言語そのものの役割が明確になってくるのである。授業のアプローチというものは様々なものがあっていいと思うが、本研究で普及すべきActivity TheoryというTTの骨組みは様々な状況で反復して使えるものである。つまり、(1)JTEとALTの利点を認識し、(2)両者の対等な関係を築き、(3)授業や教案作成のサイクルでその対等な関係を明確にすることによってTTの意義が中等教育の英語教育に浸透し、さらに強化されることを願っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

①Collins, P.J. (2014年2月28日) Team teachers as gardeners of English. *Heuristics*, 16(2). (通巻55号) 日発行 東海大学教育開発研究所, 2. (査読なし)

②Collins, P.J. & Fine, G.S. (2013). Situating team teaching in the current literature on English ownership. (英語の当事者意識に関する最新の文献にチームティーチングを位置づける) *Educational Development 教育開発* (8). 東海大学 教育開発研究所, 63-80. (査読あり)

③Suzuki, H. & Collins, P. (2013). TDE's power to shift teacher perspectives on communication. (英語教員研修: コミュニケーターとしてのパースペクティブ育成) *Educational Development 教育開発*(8). 東海大学 教育開発研究所, 45-61. (査読あり)

④Collins, P.J. & Fine, G.S. (2014). Creating supplementary readings: JTE and ALT roles. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *JALT2014 Conference Proceedings*. 東京: JALT, 433-442. (査読あり)

〔学会発表〕(計10件)

①Suzuki, H. & Collins, P.J. (2013年7月3日). TD's power to shift teacher perspectives on communication. 2013 International Study Association on Teachers and Teaching Conference. ヘント, ベルギー.

②Collins, P.J. & Fine, G.S. (2013年9月12日). Teachers' perspective shifts in the TDE program (英語教員研修プログラムにおける教員の視点の転換について) 第18回東海大学授業研究会. 東海大学教育研究所、神奈川県.

③Collins, P.J. (2013). The "S" in TEAMS: Clarifying JTE-ALT-Student Relationships. 津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス 大学院文学

研究科 英語教育研究コース 冬期公開講座. 2013年12月23日, 東京.

④Collins, P.J. (2014). Bridging gaps: Supplementary reading materials for textbook lessons. JALT 岩手支部学術講演会. 2014年4月20日、岩手.

⑤Collins, P.J. (2014). JTE-ALT-S relationships: Building a framework. 平成26年度「外国語指導助手の指導力等向上研修会」. 2014年11月19日, 富山.

⑥Collins, P.J. & Fine, G.S. (2014年11月22日). Creating supplementary readings: JTE and ALT roles. JALT 40th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition, 筑波.

⑦Collins, P.J. & Fine, G.S. (2015年2月28日). Shared intentions: Constructing a meaningful framework for team teaching English. 11<sup>th</sup> Annual CamTESOL Conference on English Language Teaching. プノンペン、カンボジア.

⑧Collins, P.J. (2015). Native and non-native English speaking teachers: Revisiting assumptions. 平成26年度 Teaching Skills Development Seminar「外国語指導助手の指導力等向上研修会」. 2015年11月18日, 富山.

⑨Collins, P.J. & Fine, G.S. (2015年8月26日). Team teaching EFL: Perpetuating the Native Speaker Fallacy? ATEE 40<sup>th</sup> Annual Conference. グラスゴー, スコットランド.

⑩Collins, P.J. & Fine, G.S. (2015年11月21日) Overcoming obstacles to meaningful team teaching. JALT 41st Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition. 静岡.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

コリンズ ピーター (COLLINS, Peter J.)

東海大学・外国語教育センター・准教授

研究者番号：10307241

##### (2)研究分担者

ファイン ゲーリー スコット(FINE,

Gary Scott)

東海大学・高輪教養センター・教授

研究者番号：70515022